

菅波 茂

3月11日に東北および関東地方を襲った地震と津波に加えて福島原発の被害は世界を震撼させた。「日本は天から見放されたのか」と誰もが疑った。私はインド連邦ビハール州のフツダガヤにあるホテルの一室で第一報を聞いた。フツダガヤは釈迦が悟りを開かれた地である。

港、関西空港、伊丹空港 救済活動とは根本的に状況が異なっていた。すなわち、地震被災と津波被災の違いだった。被災しながらも避難所診療を続ける地元の医師を支援する形式で、全国から熱意あふれる120名以上の医療スタッフを被災地に送り込んだ。総社市、新庄村、おかやまコープ、株式会社ノエビアや国際ロータリー2780地区などの緊急対応支援はありがたかった。

何故に私は日本にいないのか。阪神大震災の悪夢がよみがえった。嘆く暇があれば助け。被災者は何を求めているのか。何を必要としているのか。被災地を考える。岡山の本部に「すぐに先遣隊を被災地へ」の指示を出した。翌12日に先遣隊4名は車で仙台市青葉区に入った。私も13日にインドからバンコク空

AMD Aは仙台市宮城野地区と宮城県南三陸町、そして岩手県釜石市と大槌町で避難所での診療と巡回診療を実施し、始まり避難所医療、地域医療（保険診療）、中核病院医療そして全体医療計画整備へと経時的に移行する。阪神大震災の時にも経験したことが、一番困難なのが避難所医療から地域医療（保険診療）への移行である。阪神大震災では、全国から集まった若い医師



津波で多くが失われた岩手県大槌町を望む

## 被災者との絆



大槌町の避難所。間仕切りでできたスペースで子どもたちが本を読んでいた

して一致団結して対処することができると確信する。阪神大震災の地震被害に対する教訓と東日本大震災の津波被害に対する教訓を国民の智慧として後世に残すことは、両災害に災害医療救済活動として関わったAMD Aの責務として考えたい。AMD Aは国内での災害である阪

撤収を理解できなかった。今回は、地域医療を担うべき開業医の診療所が壊滅状況だったので、仮設診療所の提供など国の施策が不可欠だった。もちろん、日本に対する「同じく壊滅状況下にあった県立病院のみを再建しても地域医療の回復は望めなかった。」

海外では、数多くの風評が出回る中で、二つのことが注目されていた。日本の歴史上に残るこの大災害に「困った時はお互いさま」の相互扶助の精神で絆を深めることにより、起きると言われている東南海地震などに対するAMD Aグループ代表